

居場所論：「その諸相」篇

～居場所をなくすということなど～

天 沼 香

はじめに

本稿は、拙稿①「居場所論：子ども篇（その一）～前近代における『子ども』という存在の歴史的位相」（『東海学院大学紀要』第3号、2009）および②「居場所論：子ども篇（その二）～聞き書きをもとにして～」（『東海学院大学紀要』第5号、2011）の統編的な意味合いを有するものである。

順序からいえば、拙稿①の後には、②「居場所論：子ども篇（その二）～近代における『子ども』という存在の歴史的位相～」、③「居場所論：子ども篇（その三）～現代における『子ども』という存在の歴史的位相～」の二編が配され、その後に拙稿②が④「居場所論：子ども篇（その四）～聞き書きをもとにして～」として置かれ、さらに⑤「居場所論：子ども篇（その五）～続・聞き書きをもとにして～」が配置されたうえで、本稿が登場すべきところである。

しかし、各篇の進捗具合に凹凸があるため、今回は本体的な②、そして③と⑤に先んじて、本稿を掲載することとなった。掲載の順序がまったく順不同であることをご海容いただきたい。

なお、本稿でも、方法論としての「聞き書き」に負うところは大きく、したがって、前稿同様、話を「ものがたり」的に展開し、ストーリー性を重視した箇所が多いこと、さらにはインフォマントの方々のご希望に沿って、その名前は仮名とさせていただいたこと、時に地名等も変名してあることを、前もってご了解いただきおきたい。

前回同様、快くインフォマントになってくださり、聞き書きの内容を公表することをご承諾くださった方々に、深甚の謝意を表する次第である。

1. 居場所をなくす

（前回の紀要原稿で触れたような…筆者注）居場所としての故郷、そんな故郷のなかの居場所、その他、いろいろな居場所があるからこそ、人は頑張れるんだよね。

だから、地震や津波、台風などの自然災害、それに続

く原発事故等の人災によって、故郷を喪失すること、もろもろの居場所を失うことは、どれだけその当事者にとって過酷な辛いことか。

その人たちの仮の居場所としての避難所や仮設住宅が、居場所としては、どれほど不完全なものか・・・。

このような被災者の人びとのおかれた過酷な状況は、出来る限り、地球規模で、みんなで共有したいよね。

少なくとも、最大限に想像力を働かせて、その辛さを自らのものとして考える思いやりの気持ちを持ちたいね。

そこから、小さくても何か今の自分に出来ることが思い浮かんでくるだろうからね。

政治家や官僚たちは、いち早く災害の実態、被災地の状況を把握できる立場にあるのだから、即刻、被災者の人たちの思いを察知し、すぐに適切な対処をしなければいけないはずだね。

それが、彼らの仕事だもんね。

ところが、ある人がこんなことを言ってるよ。

天災とは言ひながら、東北の津波は酷いではないか。政府の役人は、どんなことをして手宛（てあて）をして居るか、法律でござい、規則でございと、平生やかましく言ひ立て居る癖に、この様な時には口で言ふ程に、何事も出来ないのを、おれは実に齒痒く思ふよ。

まるで、2011年3月11日の東日本大震災後の状況を語ってるみたいだね。でも、これはそうじゃないんだ。

1896年[明治29]6月、東北の大津波に際しての勝海舟さんの所感談話なんだよ（勝海舟「政治今昔談」『氷川清話』）。

勝さんは、幕末、江戸幕府、徳川政権のなかにあって、その限界をいち早く察知して、大政奉還後も新政府に抵抗しようとする旧幕府勢力を抑え、西郷隆盛どんと語らって、江戸城無血開城を果たした立役者だね。

でも、明治の世になってからしばらくの後には、懐旧的に江戸幕府の施策を称揚し、新政府のありようを批判的にみることも多くなってきた。

新しい「国家」創造に向けて、幕府を見限り、新政府側

に与し、そのなかで自らも高位高官を占めたけれども、その藩閥専制政治には心が離れていったんだ。同じアジア人同士が戦うことになる日清戦争にも強く反対したしね。

時にちょっと大風呂敷を広げて、ほら吹き話めいた話もしたけれどね。

けれども、時の権力におもねらない率直なものの言いは小気味よいし、事実の一端を突いていた。先に触れたような、災害に際しての政府の役人のていたらくなども、まさに本当のことだった。

びっくりするくらいに昔も今も政府の役人の事なかれ主義ややる気のなさは同じなんだね。

困ったことだよな。

かつて今も、想像力を欠落させている代わりに鈍感力はたっぷり身に付けている政治や行政の担い手たちは、政策課題に的確な優先順位を付けることも出来ず、被災地の復興に全力を尽くそうともせず、自分たちの権力や既得権益を守ることにばかり躍起になってるんだよなあ。

そんな彼らに大きな影響力を持つ経済界の動きも鈍いしね。

それどころか、ああいう悲惨な大災害をも、儲けのネタにしようとする魂胆が丸見えな経済人、新たな仕事を得る機会って観点で捉える経済人も少なくなかったみたいだね。

だから商品の包みとか、広告とかに「がんばれ！東北」とか「がんばろう東北！がんばろう日本！」とか書いてあると、なんかうそっぽくて、鼻白らむ思いがするよなあ。

もともと、「頑張る」の命令形「頑張れ」は、自らが自らを鼓舞する時に用いる言葉だろ。だから、懸命に頑張っている他者、頑張れない状態にある他者に対して、軽々に「がんばれ！」「がんばって！」なんて言うのは、とても僭越なことだしね。

世の中を治め、人びとを救うことこそが「経世済民」、すなわち経済の根幹のはずだけど、そんな認識は何処かに置き忘れてしまった経済人が多くなったのかも知れないね。

彼らには、もう一度、二宮尊徳さんの「道徳なき経済は罪悪」という言葉をしっかりかみしめてもらいたいなあ。

財界、政界、官界等々、特権階級の人たちの居場所は、権力と権限と権益とお金に満ち溢れた金城湯池の心地よい安全地帯だろ。

だから、あの人たちには、居場所をなくした庶民の辛さや苦しきなど、分かりっこない。想像力が欠けてるから、そんなことは想像もできないんだろうし、想像しようともしないんだろうね。

特権階級には幾多の心地よい居場所が与えられている半面、一般庶民の居場所がなくなってきている。

これは社会的な大問題だよな。

しかも、今日では社会のあらゆる局面において、いわゆる「マタイ効果」が着実に、覆い隠し難いほどに進行している。

これは、聖書のなかの使徒マタイの言葉、「持てる者は与えられ、いっそう裕福になるけれども、持たざる者は所持している物まで奪われることになるだろう」（「マタイ福音書」『新約聖書』第13章12節）にちなんでいるよ。

現代社会における諸格差の拡大を「マタイ効果」って言うんだよな。

確かに今日では、日本だけでなく、世界中の国々において、富裕層の人びとは、経済的により豊かになり、それに伴ってより高い社会的地位・立場も得やすくなり、高い文化を享受できるようになり、もろもろの心地よい居場所も得やすくなっている。

それに対して、貧困層の人びとは、経済的によりいっそう貧しくなり、それに伴って社会的地位・立場も得にくくなり、高い文化に接する機会からも遠ざけられ、心地よい居場所も得にくくなっている。

個人間の経済的、社会的、文化的格差がどんどん広がってきているよな。

しかも、それが、個人の力量や努力差に起因しているんじゃないかと、出自などによって決まってしまうところか問題だよなあ。

好ましくないことだね。

なんとかしなきゃね。

これは、昨今、格差拡大を是認する過度な自由競争社会に逆戻りしてしまっていることや、なんでも自己責任で片付けてしまうような社会的風潮と大いに関連しているね。

さらに日本の場合には、明治以降の近代化の過程において、中央集権化が進み、政治も経済も文化も東京一極集中となり、地方が疲弊し、画一化し、その富が中央に吸い上げられてしまっていることとも関連してるよな。

この中央集権化の流れのなかで、方言が唾棄され、のっぺらば～な共通語（標準語）が奨励されることになったんだ。

だから、持たざる人びとの復権、地方の復権、格差是正のためには、富の極端な偏在を改め、障害のある人も、ない人も働きたい人が働けて、相応の賃金を得られて、そこそこ快適な生活ができる社会を構築することが喫緊の課題だよな。

とともに、一見、ささいなことのように思えるけど、方言の再生、ふるさとの再生または創生なんかも希求したいな。

2. 辺縁としての沖縄・中心としての沖縄・居場所としての沖縄

1952年、日本が第二次世界大戦敗戦後の連合国側による占領統治から脱した後も、沖縄だけは実質的には米国の統治下に置かれ続けたよね。

ようやく1972年、「核抜き・本土並み」ってことで、日本に返還されることになったけど……。

実際には「核抜き」でもなければ、「本土並み」でもなかった。

今も、狭い沖縄県土の25パーセントが米軍基地関連で取り上げられたまま。

在日米軍基地の75パーセントが沖縄に集中。

世界一危険な米軍基地と言われて久しい普天間基地もそのまま。

1995年の米兵3人による少女強姦事件や、2004年の米軍ヘリコプターの沖縄国際大学構内への墜落事件、2012年の2人の米兵による女性集団強姦事件など、ほんの冰山の一角、顕在化した事件の他にも、人びとの安全を脅かす事件は沖縄では日常茶飯事。

地位協定によって、ほとんど治外法権が米軍には与えられている。

未だに米軍の思いのままなのが沖縄の現実なんだ。

その結果、日本という国の安全保障のために、国民の、沖縄県民の安全がなおざりにされているんだ。

もともと近代初頭までは歴とした琉球王国だったのに、一連の琉球処分によって琉球藩、さらには沖縄県にされてしまったこの南の平和な島。

それが、自らの意思とはなんら関係なく、十五年戦争最末期において、日本で唯一の地上戦の舞台とされ、戦闘や集団自決などで県民の六分の一の命が奪われ、そのふるさとは、居場所は焦土と化してしまった。

拳句の果てには、日本が無条件降伏をしてから、長い長い年月を経た今日でも、なお、大切なふるさとは取り上げられたまま、大事な居場所は基地にされたままなんだ。

今なお、自分たちの居場所を戦争に直結した場所にされ、日々、身の安全を脅かされちゃってるのが沖縄の人たちなんだ。

沖縄の人たちは、幾重にも、先祖伝来のかけがえのな

いふるさとを、安心な安全な心休まる居場所を奪われてしまってるんだ。

こんな状況を、本土の日本人は他人事みたいに思っているところがある。

これは申し訳ないことだし、いけないことだし、人倫に反することだよ。

自分たちの隣が高い鉄条網で囲まれた他国の基地だったら……。

そこで、四六時中、ものすごい離着陸時の爆音にさらされたら……。

時に、もろもろの航空機が離着陸に失敗して、近くの民家や小学校や大学の上に墜落したら……。

家路を急ぐ自分が、突如米兵に襲われ、醜い性欲のはけ口にされるとしたら……。

自分の母親や妻や恋人や姉妹や娘が、四六時中、米兵に強姦される危険にさらされているとしたら。

時に、まだ幼い少女すら性欲の餌食にされるとしたら……。

考えたくもないことばかりだよ。

でも、これが沖縄の現実なんだ。

これら沖縄の現実を見据えず、日米安全保障条約を金科玉条のごとく墨守することだけを考え、沖縄を米国のなすがままに任せ、幾多の懸案にきちんと対処しようとする意志がないなら、日本は沖縄に独立してもらおうようにしなければ、それこそ守礼の地、沖縄に対して礼を失することになるよね。

日本を守るために沖縄に泣いてもらうなんて、そんな得手勝手は許されるもんじゃないよなあ。

かつてから、沖縄には独立論が根強く存在していたんだ。

独立すれば、独立国としての沖縄あるいは琉球共和国が、主体的に米国ときちんと折衝して、より良い沖縄を築く可能性が開けるのだから。

米国における移民研究では、日本本土各地からの移民を「ジャパニーズ」と称し、沖縄からの移民を「オキナワン」と称して、別個に捉える向きも少なくない。

意図的に、そうしてるのかもしれないけど。

沖縄の人たちも、自分たちのことを「ウチナンチュ」と称するのに対して、日本本土の人たちのことは「ヤマトンチュ」って言うよね。

この距離感に関して、本土の日本人はちょっと無関心に過ぎるって言えるかもしれない。

相変わらず、中央の心地よい安全地帯に居座る政治家や官僚たちは、こういう沖縄の現実には、きちんと目を向けようとしないうえ。

想像力を持たないのかなあ。

あえて持とうとしないのかなあ。
見て見ぬふりしてるのかもしれないよ。

東京を中心として、日本全体を眺めると、南方の沖縄は辺縁の地ってことになるよね。

でも、東アジアのなかで、沖縄や東京を見てみると、沖縄は中心に位置する枢要な場所だし、東京は辺縁の地だってことが分かるでしょ。

東アジアそして太平洋全体を見渡すとき、その地政学的重要性がどちらにあるかといえば、沖縄に軍配が上がることは間違いなし。

だから、米国は、自国の世界戦略上の観点から沖縄を手放そうとはしないんだね。

でも、そんな他国の思惑のために沖縄が犠牲になるなんて不条理だよな。

そんなこと、あっていいはずないよ。

でも日本には、「米国は、日本の安全を守ってくれてるんだから、それくらい犠牲を払うのは当然」なんて、したり顔でたまたま米国政府の傀儡みたいな政治家や官僚たちが少なくないよね。

だから、米国は日本をほとんど属国扱い、沖縄を植民地扱いだし、未だに日本国自体が真の独立国家たりえてないんだよな。

沖縄の人たちは、世界一美しい海に囲まれた自分たちのかけがえのないふるさとを、世界一危険な米軍普天間基地や嘉手納基地に掠め取られたまま、その隣接地を日常的な生活の場にさせられてるんだ。

ウチナンチュは、美しいふるさとを、心地よい居場所をなくしたままなんだ。

3. 居場所をなくしたある女

ある女は、ある男と結婚した。

女は、男が清貧に甘んじ、孤高で、反俗的で、出世など社会的栄達には無縁で、無口な知的な人間・・・と信じていた。

だからこそ、女は二親の強固な反対も押し切って、その男と結婚したのだった。

男は売れない絵描きだった。

たまに売れる絵で得た少々のお金で、二人はほそぼそと、つましく、けれども愉快地に創意的に生きていた。

楽しかった。

幸せだった。

貧相なアパートは、女にとって、最上の居場所だった。

そんな暮らし・・・。

そんな日々が続いた。

そのうち・・・

やがて、・・・

男の絵が売れるようになってきた。

俄然、男は、大家を気取るようになってきた。

態度がなんとなく傲慢になってきた。

守銭奴になり、極度の吝嗇になっていった。

社会的栄達を望むようになってきた。

人の悪口を、わけても、・・・、その人のおかげで絵が売れるようになった恩人に対してまでも、裏では平気でその人の陰口を叩くようになってきた。

女が、すばらしく反俗的と思っていた男は、実はとんでもない反俗的俗物だったことが分かってきた。

女が、清らかな精神の持ち主と思っていた男は、実はどうしようもなく薄汚れた心の持ち主だったことが分かってきた。

見かけは堂々としている大きな立派な家に引っ越しても、もはや女はひとつもうれしくなかった。

女にとっては、新婚早々の時期を過ぎた貧相なアパートは、まばゆいばかりの、心が浮き立つ居場所だったが、このたいそうな門構えの家は寒々しいばかりだった。

ほどなく女は、かつては確かに男とともに在った自らにとっての素敵な居場所は脆くも消え去ったことを自覚し、その男の元を去って行く。

太宰治の佳作『きりぎりす』の梗概だ。

醜く弱い人間の本性と、心地よい人間的な「居場所」の本質を鋭くえぐっている。

太宰のこの作品のモチーフに、イプセンの『人形の家』があったのかどうかなどは、知るところではない。が、太宰が描くこの女も、イプセンの描くノラもともに、虚飾に満ちた社会的、俗的な栄達や経済的に豊かな生活のあるところなどには、真の居場所を見出すことは出来なかったんだね。

4. いじめと居場所

積極的にいじめを主導するわけではないけど、いじめっ子たちにちょっと加担する子たちっているよね。

いじめっ子たちの行状を知りながら、ただ傍観してる子たち、知らないふりをする子たちっていうのも結構いるね。

酷いと思いつつ、自分に累が及ぶのを恐れて口をつぐんでる子たちも少なくないんだよね。

そんな周囲が、結果として、いじめを受けてる子を窮地に追いやってしまうんだな。

いじめられてる子は、最初は自分の居場所を失わないように、悪辣ないじめにも懸命に耐えるんだ。

本当は、そんな居場所は、その子にとって、安心できる安全な心地よい居場所なんかじゃないんだから、さっさと切り捨てちゃえばいいんだけどね。

でも、真面目な児童・生徒であればあるほど、学校は自分にとって大切な居場所と思いこんで、いじめられても、いじめられても登校しちゃうんだよ。

そんな時は、登校なんて拒否しちゃうんだよ。

学校なんて行かなくなつて、なんてことないっていうふうに気楽に思っちゃえばいいんだよ。

まして、いじめっ子たちとの交流の場なんて、自分の快適な居場所でもなんでもないんだから、そんなところへは行かなきゃいいんだ。

でも、行かないことを実行できないまま、そうこうしているうちに、いじめはどんどん深化し、金銭を強請ったり、命を脅かすような凄惨な犯罪行為になっていくことが多い。

いじめの域を超えた犯罪行為の被害者は、けなげに懸命に、いじめっ子に分からないように救いの手を求めるけど、事なかれ主義の学校の体制や見て見ぬふりの多勢のなかで、現実に打ちひしがれ、居場所を失い、遂には自死を敢行してしまうこともあるんだ。

いじめに遭うことによって、居場所をなくしてしまうことを恐れるような感覚が昂じてくることはよくあることなんだ。

居場所をなくすってことはつらいことだからね。

だけど、さっきも言ったように、いじめに遭ってる場所なんて、自分の本当の居場所ではないんだと思うよ。

他人なんか居なくても、自分ひとりきりで安らげる居場所だってあるはずだよ。

人間社会は、人と人とのつながりが基本だけど、時には、ひとりぼっちも楽しいよ。

もしかしたら、他の人のことを気にせず、自由気ままに振舞える自分だけのひとりぼっちの居場所なんていうのは、お母さんの胎内に次ぐ、フ〜ンワリクプクプできる素敵な居場所かも知れない。

安心できる心地よい自分に合った居場所は別のところにきっと見つかるんだから、いやな場所なんて、振り向きもせずに、さっさと自分から抜け出してしまえばいいんだよ。

5. 御地蔵さんの居場所

美大生の隆くんは、彫刻が専門。

いろんな素材で、いろんな彫刻作品を作ってる。

ある時、隆くんは、どこかから大きな石を拾ってきて、あやめ池公園にほど近い閑静な住宅街の一角にある自分の下宿で、近所迷惑にならないように、なるべく静かに、カツン、カツン、カツカツ、カツン、カツン、カツカツ、その石を彫っていた。

大学での講義や実習を終えて、下宿へ帰ってくると、毎夜毎夜、ひそやかに、カツン、カツン、カツカツ、カツン、カツン、カツカツ・・・。

下宿のおばさんで、隆くんの大学の先輩でもある小百合さんは、隆くんが何を彫ってるのか、気になって、気になってしょうがなかった。

だから時折り、

「ねえ、隆くん、何を彫ってるの？」

って聞くんだけど、隆くんは、

「そんな大したものも彫ってるわけじゃないですよ」

と、口を濁しながら、カツン、カツン、カツカツ、カツン。

けれども、そのうちにだんだんと形が見えてきた。

カツン、カツン、カツカツ、カツン。

そして、ほどなく出来上がったのは、なんとも愛らしい、ふっくらぼつちやりしたお地蔵さんらしき像だった。

我ながら、なかなか良い出来だなあ、と隆くんは大いに満足して、下宿の机のうえに、このお地蔵さんを鎮座させておいた。

隆くんの下宿に遊びに来る同級生の洋一くんや幸二くんや勇くんたちも、このお地蔵さんをとっても気に入っていた。

みんなで手分けして食材を買ってきて、すき焼きパーティーをしたりする時も、誰とはなしに、お地蔵さんを仲間はずれにするのは可哀想ってことで、ちゃ〜んとお地蔵さんの前にもお皿が置かれ、こんにゃくやネギなどが供えられた。

そういう扱いを受けていると、お地蔵さんのほうでも、なんとなく自信を持つようになってくるみたいで、神々しさみたいなものがその石の体から滲み出てくるようになってきた。

そのうちに、美大のなかで、だんだん、この隆くんの

お地藏様は有名になり、遂には「拝観」(?!) 希望者まで出てくるようになったんだよ。

もともと衆生に成り代わって、その悩みを受け止め、一所懸命になって人びとを救おうとする存在とされる地藏菩薩は、他の菩薩たちと違って、つるつるの坊主頭だし、姿かたちがとっても人間的で親近感を持てるよね。

この地藏菩薩は、地獄の苦しみを救済してくれるってことで、多くの善男善女が頼りにし、信仰するのかもしれないね。

だからこそ、お地藏さんと、親しみを込めて、「さん」付けで呼ぶ人も多いんだ。

「さん」付けで人間と交流があるのは、勢至菩薩、普賢菩薩、文殊菩薩、月光菩薩、日光菩薩、虚空蔵菩薩など並み居る菩薩たちのなかでも地藏菩薩だけだもんね。

道端にひっそり佇んでいる野の仏や神のほとんどはお地藏さんか道祖神だしね。

そんなお地藏さんで、しかも隆くんの手作りなものだから、もうご近所でも大評判。

見物希望者がどんどん増えてくるので、とうとう隆くんは、お地藏さんを下宿の部屋の窓辺に移動、外に向けて鎮座させた。

これで外の街路からでも、人びとが隆くんのお地藏さんを拝めるようになったんだ。

こうして時が流れ、お地藏さんは、あやめ池公園近くのあやめ1丁目周辺に根付いていった。

けれど、やがて隆くんは、卒業して郷里の北海道に戻る時期を迎えた。母校の小樽の中学校で美術の先生をすることになったんだ。

小樽運河沿いの道や塩谷の浜辺を散歩するのが好きだった隆くんは、故郷に帰る日を心待ちにしていた。

にもかかわらず、東京を引き上げる準備をしているうちに、隆くんはちょっと憂鬱になってきた。

原因は、お地藏さんだった。

心を込めて彫ったお地藏さんただだけに、隆くんとしては、郷里に持ち帰りがかった。

だけど、ご近所の人びとがこんなに慕ってくれているお地藏さんを自分が持ち去ってしまっても良いものか・・・と隆くんは悩んでたんだ。

あやめ池1丁目に住んでいる可愛い由美子さんが、熱心に手を合わせに来ているしなあ・・・。

彼女は胎内に子を宿してるんだ。

彼女の子宮のなかでは、今を至福の時と赤ちゃん以前の子が、ユツタリ、フワリン、クプクプ、フワ〜ン、クルリンコ、クプクプ、フワ〜ンと最高の居場所での生活を謳歌している。

その子が、無事、この世に生まれ出づるためにも、お地藏さんは置いていかないといけないなあ・・・。

かといって、このまま下宿に残していくわけにもいかないし・・・って具合に隆くんは悩んでたんだ。

悩みに悩んだ末、草木も眠る丑三つ時、隆くんは、お地藏さんを双の手でしっかりと抱えて、あやめ池公園に向かった。

日中は、お年寄りや小さな子ども連れのお母さんなどで賑わう公園も、さすがに丑三つ時ともなると、暗闇のなかで愛を語らう何組かの男女が散見されるだけで、静まり返っていた。

隆くんは、しっかり抱きかかえてきたお地藏さんを、池のほとりのあまり目立たない場所に植わっているマロニエの木の根元にそっと降ろした。

自分でも思いがけなく、隆くんは空になった両手を合わせていた。

涙が頬を濡らした肌寒さで隆くんは我に返った。

隆くんは、お地藏さんの坊主頭をいとおしげに撫でた。

「さよなら。僕は北海道へ帰るよ。ごめんな。君を連れて帰れなくて」

そういうと隆くんは、振り向きもせずに、暗闇のなかを疾駆して下宿へ戻っていった。

翌日、卒業式があり、その翌日、隆くんはあやめ池1丁目を去り、小樽へと帰っていった。

下宿のおばさんの小百合さんの許可を得て、隆くんは下宿の自室の窓の下に絵入りの小さな張り紙を残していった。

皆さん、長い間、僕の作ったお地藏さんを可愛がってくださいあってありがとうございます。

おかげさまで僕は城西美大を卒業して故郷に帰ることになりました。

ですから、お地藏さんを、これ以上この場所に置いておくわけにはいかないし、かといって連れて帰ってしまうのもいけないような気がして、あやめ池のほとりのマロニエの木の根元に安置してきました。

隆

この張り紙を最初に発見したのは、足繁くその場に通っていた由美子さんだった。

その足で、彼女は、あやめ池のほとりに行き、マロニエの根元で、お地藏さんに再会した。

相変わらず、お地藏さんはゆったり微笑んでいた。

翌日、由美子さんは、手作りの赤いよだれ掛けを持参して、お地蔵さんに掛けてあげた。

その翌日、お地蔵さんには、可愛い帽子が被さっていた。

次の日には、お地蔵さんの首にきれいな胸飾が掛けられていた。

またその次の日には、お地蔵さんの手に宝珠が乗せられていた。

その頃から、お地蔵さんの前にはお賽銭が置かれるようになった。

行政は不法に遺棄された物として、撤去しようとしたけれど、近所の人たちがさりげなくお地蔵さんを守り通して、それを許さなかった。

とうとう行政も根負けして、黙認することにした。

お地蔵さんは、知る人ぞ知る、あやめ池の密やかな名物になった。

格好の居場所を得たお地蔵さんは、いっそう微笑み深く善男善女を見守っている。

以下、次稿。